

ユニバーサルデザインの モノづくり

2005公募型ユニバーサルデザイン製品開発支援事業成果報告

universal design

主催：福島県・(財)郡山地域テクノポリス推進機構

ユニバーサルデザインの モノづくりの新たな展開に向けて

公募型ユニバーサルデザイン製品開発
支援事業選定評価委員会

委員長 若井正一

本報告書は、2005年度の福島県の委託事業として(財)郡山地域テクノポリス推進機構が、広く福島県内の事業所などを対象にユニバーサルデザイン製品の提案を公募して、そこで選定された提案が具体的な製品となるまでの支援プロジェクトの過程をまとめたものです。本事業は、昨年度に続き2年目になりますが、本年度は、日本におけるユニバーサルデザイン分野の先駆者の一人である千葉大学・清水忠男教授を専門アドバイザーに招聘して、新たなUD製品の開発に向けて鋭意ご指導をいただきました。なお、選定評価委員会は、県内外の当該分野における各界を代表する11名の委員で構成されました。

今回応募された提案件数は、製造系や情報系の事業所および団体から9件でした。これらの応募案について選定評価委員会では、ユニバーサルデザインの7つの原則と3つの付則などの条件にもとづいて慎重に個別評価を行いました。特に、今回注目した点は、選定された製品が具体的な商品として市場に展開されることを想定して、その可能性や将来性などに重点を置きました。その審議の結果、最終的に各委員による投票で比較上位となった「室内用快適待合ベンチ」と「くるっとちゃぼん(回転木製台座式入浴補助椅子)」の2つの提案が選定されました。いずれも不特定多数の人が使用することを想定した具体的な提案で、ユニバーサルデザイン製品として新たな展開が期待されたものです。なお、比較上位ながら次点となった複数の提案については、選定評価委員会としてフォローアップのためのアドバイスを別途実施いたしました。今回選定された提案は、前回選定された提案がやや工芸的な要素の強い製品であったのに比べて、より生活に密着した実用品を目指したものとなりました。

選定された2つの提案は、本事業の支援プログラムに従って専門アドバイザーの清水忠男教授に直接ご指導をいただきながら、本年度の「ふくしまユニバーサルデザインフェア」などにおいて適宜消費者モニタリングを実施

しました。この間、選定評価委員会の中間報告会などにおいて、各委員からも提案者に対して商品化に向けた忌憚のない助言が行われました。それらを踏まえて、最終的な成果品としてまとめられた2つの製品は、ユニバーサルデザイン分野の新たな展開を期待させるモノとなりました。今回の成果品には、専門アドバイザーの清水忠男教授が提言している「思いやりのデザイン」が随所に表現されています。例えば、「室内用快適待合ベンチ」には、幼い子どもが座れるスツール型の小椅子群が多様に展開されてシステム化の兆しが感じられ、温泉浴場の入浴を想定した「くるっとちゃぼん」には、浴場以外の段差のある生活場面においても身体を移乗する装置として展開できる可能性が予期されます。

日常生活場面における生活者の安全性や健康性が求められる昨今ですが、福島型ユニバーサルデザインのモノづくりは緒についたところですが、そんな中で、昨年度本事業で選定された複数の提案が商品化されて、福島発のUDクラフト製品として広く欧米に紹介されたことは、当該選定評価委員会としても大変栄誉なことと存じます。本事業をはじめとする福島県のユニバーサルデザインへの積極的な取り組みなどにより以前にも増して県民のUDへの関心は少なからず高くなっています。しかしながら、欧米におけるユニバーサルデザインに対する認識は、日本の場合とはやや違いがあるようです。

今後、ユニバーサルデザインの理念をもとに更なるモノづくりを展開させるには、単に商品化のみに拘泥することなく、多様な消費者のニーズを的確に把握して共用品を持続的に創出する支援システムの構築が肝要です。そのためには、「モノからの発想」だけではなく、人間が固有する身体寸法などのハード面と生理・心理的な特性などのソフト面からその本質を深耕する「ヒトからの発想」が求められます。

UD

ユニバーサル デザイン とは？

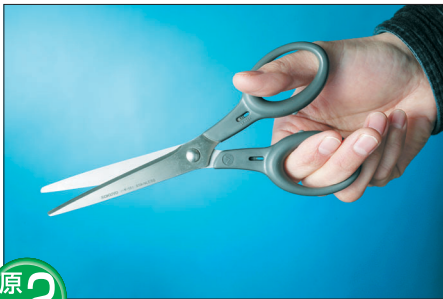
年齢や性別、身体的能力、国籍や文化など人々の様々な特性や違いを超えて、すべての人が利用しやすい、すべての人に配慮したまちづくりやものづくり、しくみづくりを行うという考え方です。ユニバーサルデザインの考え方は、アメリカの建築家でノースカロライナ州立大学ユニバーサルデザインセンターの所長を務めたロナルド・メイス氏 (Ronald L.Mace) により提唱されました。

ユニバーサル デザインの 7つの原則



原則1 公平な実用性

- 役に立ち、市場性がある
- すべてのユーザーが同じ手段・手法で利用できる
- 例) 荷物がある時や子供やお年寄りにも便利なセンサー付き自動ドア



原則2 柔軟性

- 個人の好みや能力に対応している
- 使い方を選べたり、右手でも左手でも使える
- ユーザーが正確・精密に使える
- 例) 左手でも右手でも利用できるハサミ



原則3 簡単にカンだけで使える

- 経験、知識、言語知識、集中力等に無関係に使える
- カンや予想を頼りに使える
- 例) 単純な形や色で直感的に使い方がわかる絵文字



原則4 感覚でわかる情報

- 視覚、聴覚、触覚に対してさまざまな伝達方法で重要な情報を伝える
- 例) 目が不自由でも判断がつくシャンプー容器のギザギザ



原則5 エラー対応

- 事故や間違いで生じる危険を最小限にする
- 見誤ることのない特色、形態をもつ
- 例) 簡単にはずせて、見失うことなく管理できる安全ピン



原則6 労力が少なくてすむ

- 肉体的疲労を最小限におさえられる
- ユーザーが、無理のない姿勢を維持できる
- 例) 小さな力でワンタッチ操作のレバー式水栓



原則7 利用しやすい大きさと空間

- 体格、姿勢、可動性に無関係に利用できる
- 立位、座位に関係なく、すべての要素を快適に利用できる
- 例) 誰でもさまざまな利用が可能な便利なトイレ

3つの付則

付則1 耐久性と経済性への配慮

安心して長く使用でき、使い手にとって適正な価格であること

付則2 品質と審美性への配慮

品質が優れていて機能性と審美性の調和がとれていること

付則3 保健と環境への配慮

人の健康に有害でなく、自然環境にも配慮されていること

ユニバーサルデザインのモノづくり

● 福島県・(財)郡山地域テクノポリス推進機構

CONTENTS

はじめに

「ユニバーサルデザインのモノづくりの新たな展開に向けて」

事業概要

- 1. 目 的1
- 2. 事業内容1
- 3. 実施内容2
- 4. 主 催3
- 5. 対 象3

平成17年度ユニバーサルデザイン製品開発採択プロジェクト

室内用快適待合ベンチ4

- 1. 応募時の状況5
- 2. 清水忠男氏のアドバイス5
- 3. モニタリングの意見6
- 4. 最終品7
- 5. 製作者の意見7

くるっとちゃぼん(回転木製台座式入浴補助椅子)8

- 1. 応募時の状況9
- 2. 清水忠男氏のアドバイス9
- 3. モニタリングの意見10
- 4. 最終品10
- 5. 製作者の意見11

公募型UD製品開発支援事業 講評12

巻末付録

- 講演「点から線へ、線から面へ」14
- ～これからのUDに求められる連携の発想～

● 事業概要 ●

1. 目的

少子高齢化や国際化、県民の価値観の多様化が進んでいく中で、すべての人が暮らしやすく、活動しやすい社会をつくっていくことが重要になって来ている。

このことは、製品を供給する産業側にとっても多様な使い手・利用者を想定した製品開発及び製造により、ビジネスチャンスが広がる可能性を有している。

このため、産業振興の観点から、県内製造業におけるユニバーサルデザインを取り入れたものづくり開発を総合的に支援するとともに、ユニバーサルデザインの普及促進を図る。

2. 事業内容

ユニバーサルデザインを取り入れた製品開発プロジェクトを公募し、総合的な支援を行い、製品(試作品)を開発する。

①ユニバーサルデザイン製品開発プロジェクトの公募

採択点数 3点程度

②選定評価委員会の設置

①の応募の中から、支援プロジェクトを決定するために、選定評価委員会を設置する。

公募型ユニバーサルデザイン製品開発支援事業選定評価委員会委員

役職	氏名	職業	所在市町村
委員長	若井正一	日本大学工学部建築学科教授	郡山市
委員	佐々木善壽	NPOふくしまユニバーサルデザイン理事長	郡山市
委員	星サイ子	郡山市消費者団体連絡協議会長	郡山市
委員	山本幸代	NPO法人ユニバーサルデザイン生活者ネットワーク	東京都
委員	内藤清吾	(株)内藤工業所代表取締役	郡山市
委員	薄井康	(株)うすい本社取締役	郡山市
委員	遠藤正一	サポートセンターにっこりハウス須賀川事業所所長	須賀川市
委員	吉川勝郎	吉川特許事務所長	郡山市
委員	藤島初男	福島県商工労働部産業創出グループ参事	福島市
委員	出羽重遠	福島県ハイテクプラザ会津若松技術支援センター 産業工芸グループ専門研究員	会津若松市
委員	斎藤俊郎	福島県ハイテクプラザプロセス技術グループ主任研究員	郡山市

(敬称略)

公募型ユニバーサルデザイン製品開発支援事業専門アドバイザー

役職	氏名	職業	所在市町村
専門アドバイザー	清水忠男	千葉大学工学部デザイン工学科教授	千葉市

(敬称略)

③専門アドバイザーの派遣

採択された案件に専門アドバイザーを派遣し、製品開発について具体的かつ積極的な支援を行う。

● 事業概要 ●

④消費者モニタリングの実施

デザインや試作品ができた段階で消費者団体等の協力を得て、モニター調査を行う。

⑤研究開発費の一部補助

採択されたプロジェクトに対して、100万円を限度とした研究開発費の補助を行う。

⑥委員によるフォローアップ

採択されなかった案件(次点)については、評価委員によるフォローアップを行う。

⑦報告書の作成

製品開発のモデル事例として、その開発プロセスについてわかりやすく整理し、報告書をまとめる。

開発した製品及び報告書は、県内製造業者や県民を対象としたユニバーサルデザインの普及啓発ツールとして戦略的に活用していく。

⑧UDもの作りセミナーの開催

16年度の事業成果を生かし、実践的な普及啓発を図るため、県内製造業者等を対象に、セミナーを開催する。

⑨販売促進

大規模小売店等に成果品を展示し、成果の普及を図る。

3. 実施内容

- 4月15日(金) 午前10時30分～正午 ビッグパレットふくしま
選定評価委員会委員委嘱状交付式・第1回委員会
議題／「実施要領について」
「応募要項について」
- 4月15日～6月15日 UD製品開発プロジェクト募集
- 5月9日(月) 午後2時～午後3時50分
いわき市総合保健福祉センター
ユニバーサルデザインものづくりセミナー
(参加者40名)
講師／日本大学工学部建築学科教授 若井正一氏
演題／「ユニバーサルデザインのものづくりに期待すること」
- 7月14日(木) 午後1時30分～午後3時30分 ビッグパレットふくしま
第2回選定評価委員会 議題／「支援プロジェクトの選定」
応募9点・採択2点
- 8月22日(月) 午後3時～午後4時 いわき湯本温泉旅館協同組合
専門アドバイザー派遣(1回目) いわき湯本温泉UD開発プロジェクト
- 8月26日(金) 午後1時30分～午後3時 (株)オノツカ
専門アドバイザー派遣(1回目) (株)オノツカ
- 9月16日～18日 '05ふくしまUDフェア 採択試作品展示
- 9月21日(水) 午前10時～正午 ビッグパレットふくしま 委員によるフォローアップ
(セゾン工業(株)、特定非営利活動法人シャローム、(株)コスモテック)



ユニバーサルデザインものづくりセミナー(於：いわき市)

● 事業概要 ●

- 10月4日(火) 午前10時30分～正午 (株)オノツカ
消費者モニタリング実施(1回目)モニター23人 (株)オノツカ
- 10月4日(火) 午後3時～午後4時30分 古滝屋
消費者モニタリング実施(1回目)モニター20人
いわき湯本温泉UD開発プロジェクト
- 10月14日(金) 午後1時30分～午後3時30分 県ハイテクプラザ 会津若松技術支援センター
販売促進のアドバイス
アドバイザー／NPO法人ユニバーサルデザイン生活者ネットワーク 山本幸代氏
「太陽漆器(株)(手のひら椀)」、「道田昌吾(デスク・ハーブ)」、
「(有)小瀧商店(お気に入りの器)」
- 10月31日(月) 午後2時30分～午後4時 古滝屋
専門アドバイザー派遣(2回目) いわき湯本温泉UD開発プロジェクト
- 11月22日(火) 午前10時30分～正午 ビッグパレットふくしま
第3回選定評価委員会 議題／中間評価
- 1月12日(木) 午前10時30分～正午 (株)オノツカ
消費者モニタリング実施(2回目)モニター10人 (株)オノツカ
- 1月12日(木) 午後2時～午後4時 古滝屋
消費者モニタリング実施(2回目)モニター14人
いわき湯本温泉UD開発プロジェクト
- 1月28日(土) 午後1時～午後4時 ビッグパレットふくしま
消費者モニタリング実施(3回目)モニター20人 (株)オノツカ
- 3月8日(水) 午後1時30分～午後3時 ビッグパレットふくしま
第4回選定評価委員会
午後3時30分～午後5時 ビッグパレットふくしま
成果発表会

4. 主催

福島県・(財)郡山地域テクノポリス推進機構

5. 対象

(1) 対象者

福島県内に事業所を有し、ユニバーサルデザインを取り入れた製品開発を行う企業、個人事業所、また、そのグループ。

(2) 対象製品

工業製品、生活関連製品、工芸品(医療・健康・福祉用品、産業機器、情報機器、住宅設備・エクステリア製品、家具・インテリア製品、日用品等)

(3) 対象プロジェクト

実際に製品開発、製造を行うものであり、試作品の完成を見込めるプロジェクトであること。



第4回選定評価委員会

室内用快適 待合 ベンチ



(株)オノツカ(郡山市)



1 応募時の状況

「室内用ベンチの新たな提案」(やわらかなUD)さまざまな人が訪れる公共の場。待合、集い、憩いの場に置かれている室内ベンチに身を預けることがあります。座板・背もたれの高さや角度、奥行、座りやすさや立ちやすさ、質感や肌ざわり等、しっくりくるものが意外に少ないと感じていました。「自分専用ではないのだから仕方がない」のでしょうか、何とかならないだろうか。自分でしっくり感じるもの、さらに子供から高齢者までみんなが心身共に快適で楽しい時間を共有できる、そんな室内ベンチの誕生をみんな待ち望んでいるのではないか。そんな思いを抱き応募しました。素材は地域の恵みである木を用い、本来の持ち味を封

じ込めるのではなく直接五感に伝えることにより自然の恵みのすばらしさを体感できるもの。またこれからは「グリーンコンシューマーリズム」という思いも込め、あえて無塗装品でチャレンジすることにしました。それは物との関わり方の再考をも意味しています。恵みを感じれば感謝の心が芽生え手入れをする。そしてみんなで大事に使い込んでゆくことで歴史が織り込まれ味わいが増し風格が備わる、そんなものとの関わりをもつことにより今忘れ去られようとしている「作法」や「物への愛着」「郷土愛」を育み、メンテナンスフリーのものでは味わえない心の充実が得られ、スローライフの本質に繋がると考えました。

2 清水忠男氏のアドバイス

三度にわたる具体的アドバイスやコミュニケーションを通じUD思想の一端を垣間見ることができ製品に反映することができました。

- ①背もたれ上部が高いことを活かし手すりの機能を持たせることにより支えが必要な人にも対応できるのではないか。



- ②1号試作品の両側板は寄りかかれたりでき遊びの雰囲気があるが、UDの視点から肘掛機能を持たせた方が良いのではないか。
- ③側板も角・稜線の処理をアール(曲面)に加工したほうが安全で触り心地もよく優しい雰囲気作りに繋がるのではないか。
- ④杉の木の持つソフトさを大事にしたほうが良い。
- ⑤スツールはおしゃれで楽しい雰囲気があり高さチョイスが可能なので単独でもいけそうだ。座面のサイズをもう少し大きくしたほうが安定感が増す。

⑥高さ調整のための板座布団というアイデアは面白い。ベンチ座面をあと10mm下げ、二重の板座布団も作ったらどうか。その際軽くする工

夫も併せてすると良い。

⑦スマートなデザインが美しいのでディテールでその雰囲気を壊さないようにしたほうが良い。

3 モニタリングの意見

3回の消費者モニタリングの他、ユニバーサルデザインフェア出品、住まいと暮らしのギャラリー「つぼみの家」を含め延べ100人に及ぶ貴重な声を伺うことができました。

A. 座り心地の評価

体が吸いつけられるようでとてもよい。背・座板の高さ奥行・角度が体に合い座り心地が良く疲れにくい。座って自然の弾力があり気持ちよい。適当な高さの肘掛があり楽で良い。背もたれ部の手すりはありがたい。手すりの太さに安定感・安心感ある。両手で肘掛が使えると良い。肘掛がないほうが一人くらい多めに座れるかも。長時間座ったら痛くなりそう。

B. デザインの評価

シンプルで美しく飽きがこない。角丸く優しい印象。座ってみたいと思わせる・座りたくなる。素材の持



つ質感や特性も伝わり優しいイメージとマッチしている。もっと楽しい雰囲気があっても良い。

C. 板座布団の評価

高さ調整用板座布団のアイデアには驚いた。自分の身長に合わせられるのが良い。背もたれに当てることで奥行調整にも使えて良い。高さ調整用ということがわかりにくい。落したら危険。盗まれそう。必要ない。

D. スツールの評価

足乗せて楽。色々な高さがあるのが良い。色々な使えてありがたい。可愛らしい。実用と遊び心がありとてもよい。脚が細く安定感や強度の不安を誘う。

E. バリエーションの評価

組み合わせ等で色々な人や場面に合うように工夫されていてとてもよい。二人掛・一人掛用があれば住まいにも使ってみたい。

F. 木の質感や環境に対する評価

ぬくもり・肌触り・柔らかさ・優しさ・香りが心地よくとても落ち着く。色・節・美しい。使うほどに味わい。子供たちに触れさせたい。癒される森の中にいるよう。金属、樹脂にないあたたかみ。環境に優しい。温暖化対策。汚れが心配。どんな手入れをしたら良いか。

G. その他

盗難防止の工夫が欲しい。飲み物を飲むときテーブルがあったほうが良い。

4 最終品

■製品名(仮称)

みんな快適室内ベンチ
(ネーミングをただいま検討中です)

■基本的コンセプト

さまざまな人が訪れる公共の場。待合、集い、憩いの場で子供から高齢者までみんなが心身共に快適で楽しい時間を共有できる室内ベンチ、スツール。

■特徴

☆五つの「心地よさ」

- ①スギの優しい色や香り、肌触り。
- ②座面・背もたれの高さ・角度・奥行・弾力。
- ③体をしっかり支えてくれるゆったりサイズ。
- ④すっきりした美しいデザイン。
- ⑤べたべた・つるつるがない。

☆五つの「あったら助かる」を実現

- ①背もたれの所が手すりにも使えたら。

- ②座面の高さが変えられたら。
- ③両側に肘掛があったら。
- ④子供の小さな腰掛があったら。
- ⑤物をのせたり、脚を乗せられるものがあったら。

☆二つの志向

- ①グリーンコンシューマーリズム
(地球環境に配慮した商品)
- ②サステイナブルデザイン
(木は化石エネルギーに依存しない循環可能なエコマテリアル。地域の恵みを地域で活かす)



5 製作者の意見

今回の応募は当社の新しい価値創造へのチャレンジでした。活動を通じたたくさんの方々との出会いとさまざまな意見を頂き当初試作品はどんどん磨かれ確実に進化を遂げ、みんなの思いの結晶であるUD製品に仕上がったと感じています。最後まで葛藤を強いられたのは杉本来の持ち味を活かすか封じ込めるかということでした。どんな物差しを当てるかで答えは変わりますが、「応募時の状況」での説明通り無塗装品で関わることで今まで忘れていた心を取り戻す呼び水にできればという思いがあります。当然併せて汚れを回避したいというニーズへの対応として自然系含浸塗料によ

る表面保護をメニューに加えることにしています。3月8日の最終評価委員会及び成果発表会で最終試作品の発表を行いました。各委員の方から当初試作品に比べUD度が高まり魅力的なものに仕上がったといううれしい評価を頂きました。今後はこの製品を通じさまざまな人が訪れる公共の待合、集い、憩いの場で心身ともに快適で楽しい時をすごせるお手伝いができればと考えています。あわせてUDやグリーンコンシューマーリズムを21世紀の作法としてたくさんの方と共有し「うつくしまふくしま」のUD環境構築に貢献できればと考えています。

お問い合わせ

株式会社オノツカ 〒963-0107 福島県郡山市安積3-200 (担当者:小野塚彰宏)
TEL024-945-1393 FAX024-947-0266 E-Mail onotsuka-senmu@gold.ocn.ne.jp



いわき湯本温泉UD開発プロジェクト(いわき市)

くるつとちやぽん

(回転木製台座式入浴補助椅子)



1 応募時の状況

少子・高齢化が進み、また温泉の健康増進・癒し効果が見直され、最近の温泉利用者に占める高齢者の割合は急激に高まっている。しかし、温泉観光地の温泉（脱衣所・洗い場・浴槽など）は必ずしも高齢者に優しい作りにはなっていない。

それぞれの旅館が独自に、または福島県の「やさしいまちづくり推進事業」などを活用して、段差の解消、手すりの設置、補助用具の導入などに努

力している。

いわき湯本温泉旅館協同組合青年部は、地元の金属加工会社、木材加工会社と協力して、健康な高齢者も体が不自由な高齢者も、同時に、身体的機能が不十分な方も、妊娠中の女性や小さな子供も安心・安全に入浴できる入浴補助用具の開発をすることとした。

2 清水忠男氏のアドバイス

第1回

- お風呂全般に利用できるという製品より、温泉、大浴場に特化した物にしてはどうでしょうか？
- 上下前後のスライドをつけてみると、浴槽に近づけられそうですね。
- 浴槽によってエプロンの高さはさまざま。足が伸縮できないかな。



第2回

- 背もたれを付けると安心感が生まれますね。
- 台座部を曲線にしてみると、やわらかさが出るね。



- 手摺りの高さを考慮しましょう。

第3回

- エア式の上下昇降はできないかな。
- 転倒しない工夫…浴槽に固定して使っても良いね。



3 モニタリングの意見

- 身体が不自由な方でも温泉に入れるようにという考えで作られたことは良いと思います。
- 座面の高さが低いように感じられました。もう少し高いほうが良いと思います。
- 立ち上がり、着座時に腕の力が必要。手すりの高さを少し高くしたほうが良い。
- 足が不自由な方が回転時に足を乗せることができるようにしたほうが良い。
- 座面は抗菌にしたほうが、使う側の気分が違おうと思います。
- 浴槽内または、壁面に立ち上がり補助の手すりがあるところに設置するのがよい。
- 介助する側としては使ってみたい。
- 身体の不自由な人には良い企画と思う。
- 安定性が欲しい。ちょっと不安定。
- 太っている人もおり、幅を広くしたりする工夫があればよい。
- 脱衣所で座ってもらい、いすに車輪をつけ、湯船まで押していけるようにする。
- 浴槽に入りやすい。
- 足を乗せるバーは無いほうがよいと思います。
- 高さを調節するものがあればよいと思います。
- ひとりで(特に家庭用のお風呂)入るときに浴槽のへりの高さが高いために足が上がりなくて苦労していたものが、これを利用すれば、介助人を含め楽に入浴できると思った。
- 背もたれはもう少し高いほうがよい。
- 座面は水がたまらないように穴を開けるなどしたほうがよい。

4 最終品

- 足が伸縮できるようにしてほしいとの声もあったが、手すりとして体重をかける場合の安定性を重視し、現在の形になった。温泉入浴を想定しているため、無機質な素材をできる限りさけるため、座面と手すりは木を利用した。



5 製作者の意見

○ユニバーサルデザインに配慮した点

- 足腰が弱っている人も、介助者に椅子を調整し、座らせてもらえば、浴槽の中では回転式台座を利用して、介助者無しでも利用者は無理のない姿勢で入浴を楽しむことができること。



○特徴

- ステンレス製(重量に配慮)、滑り止め、木製台座など、製品全体にフェイル・セーフ(安全

性を確保する方法)を取り入れていること。

- お尻がふれる台座は木製であり、肌になめらかであること。その木製台座には抗菌、防水、防腐のコーティング液が塗られていること。

○セールスポイント

- くるっとちゃぼん(回転木製台座式入浴補助椅子)は、安心・安全に入浴できる椅子である。
- 特に、銭湯や特別養護老人ホーム、医療機関などの入浴施設への導入が考えられる。



お問い合わせ

いわき湯本温泉UD開発プロジェクト

〒972-8321 福島県いわき市常磐湯本町三函208(担当者:里見喜生)

TEL0246-43-2191 FAX0246-43-3734 E-Mail elegy@ninus.ocn.ne.jp

販売価格

88,000円(税別)

公募型UD製品開発支援事業

● 講 評 ●

清水 忠 男

この事業のユニークさ

私は、製品デザインのコンペティションやコンクールの審査委員を依頼されることがよくあります。国際的、全国的なもののほか、地方の産業振興を目的としたものも少なくありませんし、ユニバーサルデザインをテーマにしたものも出てきました。そうした中で、本事業は大変にユニークなものだと感心させられています。提案されたデザインの中から優れたものを選んで単に表彰するコンペティションやコンクールにとどまらず、地域の要求

に沿い、製品化の可能性のある提案について、その具体化に向けたアドバイスを行い、提案者自らのより良い製品づくりの展開を支援するということ自体、ユニークなのですが、さらに、こうしたプロセスに、高齢者、障害者、母親や子供など、数多くの多様な方々をモニターとして採用し、試作品を使っていただき、意見をお聞きして、それらを基に更なる改良をはかることを繰り返す、というやり方をとっている点が特筆に値します。

今回選ばれた2点のデザイン提案は、いずれもデザインの専門家によるものではなく、地域に根ざした産業にたずさわる方々が、それぞれの仕事の中から必要性を見出し、発想したものでした。

「室内用快適待合ベンチ」

このベンチを提案された(株)オノツカの小野塚さんは、日頃、木製住宅の建設や素材提供にたずさわっておられるのですが、地元の針葉樹材の良さを知っておられるだけに、これらを身近な家具に使うのが望ましいと考えました。

提案されたのは、針葉樹の風合いを生かしたベンチで、使う人が自らの身長に対応した座面高を得られるように、木製座布団が添えられています。小柄な人や子供の場合は、通常より低めに設定された座面にそのまま腰掛け、身長が増すにつれ、木製座布団を1枚または2枚重ねで使うのです。また、幾つかの高さバリエーションを持つ木製の足載せも座面下部の空間に用意されています。子供がベンチに腰掛けて足をぶらぶらさせてい

ると大腿部がうっ血してしまい、その苦痛のため、ベンチにじっと腰掛けていられず、席を離れてしまうという状況をよく見かけますが、このような足載せがあれば、そういう事態も避けられるでしょうし、大人だったら疲れた足を載せてくつろげるでしょう。ちょっとした荷物置きにもなりそうです。

このようなアイデアによる試作品を、数多くの多様なモニターの方々に実際に使っていただき、ご意見をうかがい、何回もの試作を重ねた結果、当初のアイデアのほかに、側面パネルの形状を変えて肘掛とすること、座面間口の1/3程度の位置にも肘掛を設けて、腰掛けたり立ち上がったたりする動作を助けること、背もたれ背後に沿って手がかりを設け伝い歩きの助けとすることなど、細やかな心配りが加えられ、全体の形もより親しみの持てるものになりました。木のぬくもりと手触りを生かした思いやりベンチとして、図書館、公民館等の公共施設で使われるにうってつけだと思われます。

「くるっとちゃぼん」

一般の住宅の浴室では、浴槽の縁が床面よりかなり高くなっているため、入浴しようとする高い縁をまたがなければならない。それが苦痛あるいは困難であるという人も多いのです。それに比べると、温泉旅館につきものの大浴場では、浴槽の縁が床面近くに設定されていることが多く、それが空間ののびやかさにつながり、ゆったりとした雰囲気演出しているばかりでなく、入浴する動作がたやすいと思われがちです。しかし、実際のところ、足腰の弱った高齢の方々や下肢に障害を持つ方々にとってみると、低い位置にしゃがみこむという動作がかなりきつい。それどころか危険な場合すらあります。

いわき湯本温泉の若手グループの皆さんは、日頃、利用客の声に接しているだけに、この問題に着目し、その解決策として、回転木製台座式入浴補助椅子の開発を思いつきました。浴槽に入るにあたって、しゃがむのが困難な方には、ある程度の高さを持つ肘付きの木製台座に腰掛けていただき、そのまま一回転させて、湯船に足を下ろし肘掛を

支えとしながら湯につかっていただく、という考えです。目前の明らかな障害を解決しようとするバリアフリーの考え方に近いものですが、ユーザ設定が「しゃがむことが困難な方」という大きなくくりであり、介助なさる方の困難さも解決するというので、より多様なユーザの要求に応えようとするユニバーサルデザイン製品になりうると評価され、開発支援対象となりました。

こちらでも数回にわたる試作ごとに、実際に大浴場に持ち込み、多様なモニターの方々による試用と意見収集を行って、改良を続けてきました。当初の提案と比べると、台座は背もたれや持ちやすい肘掛が加わった木製となり、高さ調節機構も4本脚個別調節タイプから一挙に調節を行える方向が模索され、全体的にかなり使いやすいものになっています。ただ、大浴場の床面と浴槽の縁との高さや、縁から浴槽の底あるいは足踏み段までの深さが旅館ごとに異なるため、これらへの対応をはかった上で確実に固定する方法や、利用客の伸ばした脚の保持の仕方、座面のより簡易な上下機構など、解決に向けて引き続きの努力と時間が必要な諸点も残されていますが、開発プロジェクトの皆さんの意気込みを見ていると、実現も遠くないと思わせられます。

まずは県内での総合的 利用を目指して

今回、成果発表された二つの製品については、さらなる改良を経て、それぞれがふさわしい場所で使われるようになるのが目指すゴールですが、まずは、次のような夢を実現したいものです。

いわき湯本温泉に出かけると、温泉利用客は、どこの旅館のロビーでも、そこに置かれた「室内用快適待合ベンチ」に出会います。その木のぬくもりや多様な人々に対する思いやりのデザインが、

癒しを求めてやってくる温泉利用客に好ましい印象を与えます。さらに、大浴場に入ると、そこには、「くるっとちゃぼん」があり、高齢の方や下肢の不自由な方々がそれを使って楽に湯船に出入りしている姿が見られます。利用客の思い出の中には、「誰にもやさしい心配りをしている福島県の温泉町」という印象が芽生えて行くことでしょうか。そうした発展が県内のあちこちの温泉地で連鎖的に見られるようになり、やがて日本中に広まって行くことになれば、なんと素晴らしいことではないでしょうか。心から期待しています。

平成17年度公募型ユニバーサルデザイン 製品開発支援事業成果発表会

日時／平成18年3月8日(水) 15:30～17:00

会場／ビッグパレットふくしま 4階 プレゼンテーションルーム



講演「点から線へ、線から面へ」

～ これからのUDに求められる連携の発想 ～

講師／千葉大学工学部デザイン工学科

教授 清水忠男氏

Profile

1942年生まれ。クランブルック美術大学大学院卒業。
ザ・バーディック・グループ主任デザイナー、ワシントン大学助教授
を経て91年、千葉大学工学部教授。ID、環境デザインが専門。

1 バリアフリーからユニバーサルデザインへ

今日、二つの非常に素晴らしい考え方の製品が登場してきましたが、これも一つ一つ完成しているだけでは、うまく働きません。例えば「くるっとちゃぽん」というものを設置した温泉に行きます。そこで、大浴場に行けばこれがありますが、そもそも湯本の温泉にどうやって行くのか、それから温泉に行ってそれぞれの旅館に入っても、そこに階段があってうまく行けない、階段は上がれるが手すりがよくないでは困ります。それに、こういう素晴らしいベンチがあってそれが使いやすいわけですが、それが置かれているすぐそばに様々な障害物があるとそこは通れないというようなことがあります。素晴らしいアイデアのものは一緒に使われていくと、その場所のイメージがすごく高まるということがあります。そのため一つ一つの完結性を大事にするのは当然ですが、それがいろいろ関係付けられていくことが大変重要だと思います。

これまでの「ユニバーサルデザイン」というのは、特定の人 の 体 に 合 う よ う に、ま た 特 定 の 人 の 種 類 を 増 や して い こ う と い う よ う な 考 え 方 で し た。「ユニバーサルデザイン」ということが言われる前に、「バリアフリー」という考え方がありました。「バリアフリー」というのは言葉通りで、障害、バリアを取り除く、フリーにするという意味です。これはもちろん大事なことで、障害があれば取り除かなければなりません。ただ、「あなたのためにこうしましたよ。」というようなことを言われてしまうと、「私だけ特別なことにしないでよ。」というような気持ちになります。だから、出来れば様々な人にうまく使えるようなもの・環境・情報を最初から考えてあげることが重要になってきます。それが「ユニバーサルデザイン」と言われるものです。

ところが、「ユニバーサルデザイン」というのは誤解されることが多く、一つのもので誰にでも適用出来る

ものだと思われがちです。しかし、一つのもので誰にでも適用出来るもの等は、ありません。それならば、どのようにすればよいのかについては、様々な考え方があります。

一つは、選択肢を用意するということです。例えばベンチの場合、高さが体の大きさの違いによって、ベンチの高さも変わるといいと思います。ところが、ベンチの一つ一つが動くとなれば、資金がかかってしまいます。それに対してオノツカさんの場合は、木製の座布団があり、背の低い人だったら40センチの座面のところへ腰掛けます。もう少し高さが必要だったら脇にある座布団のようなものを使って、3センチ大きくします。すごく背が高ければ二枚重ね、三枚重ねというふうに、選択肢が出来るように考えられているわけです。足乗せもそうです。子どもが長い時間ベンチに座れないのは、子どもの足の裏がうっ血するからです。下に足がついてないため、宙に浮かしていると、足の内側に血が溜まってしまって痛くなる。それで子どもがベンチに座れず降りていってしまうわけです。そういう子どもにもちょっとした足乗せを用意してあげることが考えられます。その他、女性のバッグを置く台なんかをもうちょっと考えられるといいのではというお話がありました。そのように、様々な要求がされます。

そしてもう一つは、高さが変わる、回転する、肘掛が動くなど、そのもの自体が変化していくというような形で、様々な要求に対応するというものもあります。実はこの「くるっとちゃぼん」は、それに近い発想です。これも、それぞれ温泉の大浴場に入る時の縁の高さがそれぞれ違います。そこで、高さ調節をする部分で対応するようになっています。

それに、同じような雰囲気素材を使い、空間のイメージを損なわないかたちで多様なものを用意する。これも一つの方法です。

ユニバーサルデザインというのは、例えばシャンプーのボトルなどで、目が不自由な方でも触るとわかり、私たちも使いやすいというものと思われがちです。しかし、全てがそういうわけではなく、様々な方法を用いながら少しでもより多くの要求に応えていこうというのがユニバーサルデザインです。しかし、最近はユニバーサルデザインという言葉の他にも耳にします。包括的な何でも含んでしまうようなデザインという意味で、ヨーロッパの方では「デザイン フォー オール」というような、デザインの考え方が登場してきています。その理由というのは、既存のデザインが売ればいいという、使う人のことをあまり考えないデザインが多く、その反省として、人を思いやるデザインということが言われはじめました。

2 思いやりのデザイン

それならば、どうデザインをしたらいいのかということですが、今回のプロジェクトがとてもいいというのは、使う人の現場から出発しているということです。

人間が作り出す物を製品という言葉で言ってみますと、製品によって作り出される環境というのがあります。皆さんがいまここにいらっしゃるこの部屋、これは人間が作り出したものです。そして人間が作り出したテーブルを使いイスに座っています。今言ったように照明があって点けたり消したりすることによって環境が作り出されているわけですが、これらは人間が

作り出した環境です。それに対して、これまでの製品の開発というのは、消費されることを目指す製品の開発でした。そうすると、消費されることを目指す製品の開発の相手は消費者です。そしてその評価というのは市場において決まります。どういうことかという、マーケット・市場においてその製品が占める率が何パーセントか、だからこれはすごく売れている、とてもいい、そういう考え方です。

一方、生活環境を形成することを目指す製品の開発の場合は、相手は使い手です。評価は、使う人と使

われる側において評価が決まります。この時は、市場のほうではマーケットシェアが何パーセントなんていうふうに数字で言いますが、使う人と使われる側においての評価というのはそういう数字ではなく使い手の声です。今までの消費されることを目指す製品の開発において、相手は消費者で市場において評価が決まりますので、市場を調査するわけです。そこでこれは市場から出発するデザインというようなことが言えるかと思えます。製造や営業の意向に応えるデザインですね。その時にデザインの開発の手法としてよく使われる方法は、この市場において我が社の製品と他のいろいろな会社の製品を比べてみると、この製品はこの位置、この位置で比較することが出来る。そうすると市場において出てこなかった部分がある。そこがねらい目であるので「今度は、そこ攻めるぞ」ということになります。大量生産の場合には、初期投資、いろんな形態等が必要になってきますので、多くの資金をかけて売れ筋だから、ターゲットだからやると言っても、失敗することもあるわけです。なぜなら、空いているところというのは、どこの会社も手をつけていないので確かに穴場かもしれません。けれども実は要求がないからそこに製品がないかも知れません。そんなふうはこの方法は危ないのです。一方、生活環境を形成することを目指す製品の開発においては、相手はユーザーで使う人と使われる側において評価が決まりまして、調査はマーケットではありません。使う人と使われる側を調査します。そうすると、デザインをする時に、最後の最後まで使う人と

使われる側、生活の現場というものがついてきます。

では、どの様にやるのか、ということになります。それはまず、ユーザーとその人に関わる人々の行動をその場で可能な限り詳細に観察して記録します。モニターと名付けられた人々、多様な人々に来ていただいて、どの様に行動しているのか見ているわけです。そしてユーザーとその人に関わる人々、それをサポートする人や家族、そういう周囲の人々との関わりも重要でその場で可能な限り時間をかけて話を聞くということが大事です。そういうところから把握した事実から、そのユーザーだけでなく、その人に関わる周囲の人々の要求もまた同時に可能な限り数多く抽出するわけです。そして選び出された要求項目、問題点それぞれの関係を考えてグルーピングしていきます。そのとき、この人はどうだろう、この人はどうだろうというふうに関係ない方面から考える必要があります。そして、グルーピングされたいくつもの問題点に対する解決の方向性を考えます。ここで初めてデザイン要件というデザインをする手掛かりが出てくるわけです。一つは個人的な要求に対する解決から出発して、よりユニバーサルな製品に発展させたデザインであります。それから、二番目は、特定のユーザーグループとその生活場面における要求から出発してよりユニバーサルな製品に発展させたデザインがあります。それから、地域住民の要求から出発してよりユニバーサルな製品に発展させるデザインです。

3 思いやりデザインの必然的な広がり

今日は先ほども言いましたように実は「点から線へ」というお話をしようと思います。皆さんのお手元にお渡しした資料の裏面のほうに、思いやりデザインの必然的な広がりを書いてあります。先ほども言いましたように「ユニバーサルデザイン」とか「デザイン フォーオール」というのは、いわば人を思いやるデザインです。その思いやりのデザインというのは、例えばハンディキャップ、障害を持っている方々に対して思いやるなんていうこともあるわけです。さっき言いました

「バリアフリー」のデザインも思いやりでしょうし、それよりもっとより広げていくというのも「ユニバーサルデザイン」でやはり思いやりです。それから、道行く人々への思いやり。「ああ大変だな。」「じゃあ、お手伝いしましょうか。」的な発想から発展してくデザインもあって、それも「ユニバーサルデザイン」になります。それから、道を行くお年寄りなんかの荷物を持ってあげて一緒に歩いて行くと話が弾んで、というようなこともあります。

そういうものと似たようなことで、商店街が非常にシッター街になって元気がなくなってきているのですが、その中で元気なお店がいくつかあります。調べてみると、たとえば魚屋さんなどは、「この魚はこんな栄養がある」とか「この魚はこんな料理をするといいよ」というのが、絵でかかれています。その奥さんが作ったステンドグラスの作品や花が飾られ、魚屋さんという感じではありません。そこへ行くとみんな楽しそうに、「この魚、こんな風に料理出来るのか。」「こういうふうには栄養があるのね。」などと言いながら来るわけです。そして、その魚屋さんのお店の前に縁台が置いてあります。よく見るとそこにお年寄りが来て「ああ、疲れた。」と言って腰掛けて、魚屋のお兄さんと話始めるわけです。そうすると、そこに通りかかったまた別のお年寄りが集まり、立ち話をはじめます。そしてお兄さんといろんなことを話しているうちに「ああ、お兄さん、申し訳ないね長居しちゃって。じゃあ、これ買ってこようか。」と言って、二、三品買っていきます。申し訳ない時間を費やしたから、というような発想で買物をしていくわけです。

これはつまり、お年寄りは疲れた体を休める縁台があり、お店の人にとってみればそれによって物が売れます。それから、お年寄りみたいに話が始まるというコミュニケーション、近所の人がお店を仲立ちにして集まっていくというコミュニティという、近隣の良いあり方が展開するわけです。ですから、そこにベンチを置く、縁台を置くということは「コミュニティデザイン」と最近言われますけどもそういうようなものにつながるわけですね。いろんな人がいろんなふうに使えらるベンチ、縁台を置くことが、今度はコミュニティ、地域の活性化に

つながってくるわけですね。こんなふうに思いやりというのが広がってきます。そうすると、例えば家族や親しい人への思いやりというのが当然のように「ユニバーサルデザイン」につながり、近所の人たちに対してとなれば「コミュニティデザイン」につながります。

そして、昔の人たちが一生懸命作ったこういう素晴らしい建物があるなら、これを何かうまく生かす方法はないかなと考える。すぐ壊してしまうのではなく、それをうまく生かせないかと考えます。これも「サステイナブルデザイン」と最近言われる、出来るだけ今あるものをうまく生かすというやり方です。それから、未来の世代について思いやります。私の子ども達の時代、あるいはその先の人たちが、私たちと同じような楽しみを、続いて持てるようにしてあげたいというようになれば、限界のある化石燃料なんか使い切ってしまうわけにはいきません。そうするとこれもできるだけ現状の資源というものを維持していきましようという「サステイナブルデザイン」につながります。それから私たちの健康を維持する、あるいは様々な生活を維持するのは地球環境です。これを大事にしたいという事を思いやるのは「サステイナブルデザイン」であろうし、「エコロジカルデザイン」です。そんなふうに思いやりのデザイン、思いやることを中心にして考えると、「ユニバーサルデザイン」の思いやりのデザインという心は様々に展開していきます。それを、どういうデザインと名付けるかなんてあんまり重要ではありませんが、いづれにしても「ユニバーサルデザイン」の本質の思いやりのデザイン、思いやるということは、そういった意味で非常に価値があると思っています。

4 共生のデザイン

マズローという学者が「人間はいろんな欲求を持っている」と言っています。まず例えばどうしても満たされなければならない欲求、それは安全性とかそれから生理的に快適でいたいといった、基本的な要求です。満たされると次に我々は「何か勉強していきたい。」「こういう雰囲気のもの欲しい。」と、次の段階の要

求を出してきます。これを成長欲求と言います。そして更にそれが満たされていくと、自分自身をもっと高めたいというようなことで自己実現される。「自分が本当ならここまで成長できるのではないか。」「発展できるのでは。」というように考えると言います。そういうように順番に欲求を持っていくというふうには彼は言っ

ているわけです。

例えば戦争直後、必要なものがないのです。だから、基本的要求を満たしたい。しかし、今の世の中は色々そろっている時代なので、最初から自分の好きなものへと行ってしまいます。それはそれで大事ですが、やっぱり満たさなきゃならない基本的な欲求があって要求があります。したいと要求することは、それは当然のように満たされなければいけないわけです。ですから、今回紹介された製品というのは、基本的な要求を満たし、人間の欲求の全体的なところを満たそうとしています。

マズローが亡くなる直前に書いてあった言葉に、共同体発展欲求という言葉があるそうです。マズローの考え方によると、人間の欲求はそのように基本的な欲求から発展的な欲求、それから自己実現という

総合的なものになるというようなものです。つまり、自分のみの、あるいはある一人の人の欲求が満たされるだけではなく、いろんな人の欲求をうまく共同としてとらえ、全体を満たしていくことが大事だと彼は最後に言っていたそうです。それは一緒に生きる、共生のデザインということかなというように思えます。

先ほど思いやりのデザインと言いましたけれども、思いやりというと片方から片方に思いを満たすといった、慈善的な印象に抵抗がある人がいるかもしれません。しかし私たちは様々な人と一緒に生きています。そう考えるとデザインもまた、いろいろ変わってきます。そうなれば、共に生きることが必然となり、共生のデザインが必然となると思います。それで共生、一緒に生きるというふうを考えれば、それぞれ連携させて関連付けられて総合的に使われると、効果的になります。

5 観光を例として

そこで今日はサイトシーン・観光ということを例にしながら話してみたいと思います。

観光というと観光業者と思うかも知れません。しかし、例えば外から見て、福島の素晴らしい部分は、恐らく福島の人たちも気が付けばそれはとても素晴らしいことと誇りに思います。つまり、そこに住む人たちが快適に誇りに思うような環境の中になれば、それは外側からの目としてもとても素晴らしいことです。

南房総では、「ゆったり健やか型観光」というものを推進しています。この南房総地域は、東京から近いので、自動車や観光バスで日帰りしてしまうような日帰りスポット型観光、高速型観光が一般的です。しかしそれでは一部が潤うのみなので、ゆったり滞在していただいて、徒歩や自転車を使って健やかに散策しながら、自分自身で魅力を発見していただくような「ゆったり健やか型観光」に移るべきではと考えています。この場所は都心から近くて比較的温暖な気候で、1月2月に花でいっぱいになるような地域です。南房総は三方を海に囲まれた半島ですから美しい自然景観があります。漁村の風景なんかも非常に魅力的です。

こうした小さな魅力を味わうには車では味わえません。徒歩や自転車を使う方がいいのです。歩いているとさっきお話したように地元住民と交流が出来ます。そういう小さな魅力をたどっていくためには案内表示が大事です。車のためのサイン道路標識は「ここから10キロ先右になんとか」と、高速で走っているドライバーの目に留まるように一瞬分かるように表示するだけです。しかし歩いている人に対しての表示は違ってきます。今、あなたがいるのはここで、この近くにこんなようなものがある、このお寺のところにはこんな物語がありますよという様な表示です。また別の町で、歩いてくと標識があります。そこにはお年寄りがトイレに行きたいというときトイレの位置が表示されていたり、それから面白い写真が出ていたりしています。そうすると歩いている人は「これは何?この近くにこれがあるの?行ってみようかな。」と興味を持って探し出します。そんなような仕掛けがサインとして描かれているわけです。こうした点在している魅力をたどるには、歩くだけではなくて自転車が丁度いいです。レンタサイクルで散策してもいいし、この頃折りたたみの自転車を持

参し散策する方も多くいます。自転車のいいところは、小回りがきくために散策に適していること、環境に優しい移動手段であること、健康的な移動手段であることがあります。このように、自転車をうまく使っていると言えますと、地域イメージの向上に貢献することになります。例えば先ほどの湯本温泉の場合で十数軒の温泉皆どこもがこういうような「くるっとちゃぽん」のような配慮をしてある。そこにオノツカさんの優しいベンチが置いてあると、この地域は優しい心遣いをしている場所だというイメージになります。

話を戻しますと、「ゆったり健やか型」観光のために自転車を活用することができます。レンタサイクルでまわると、お年寄りが買物のカートを押して歩いてく姿によく出会います。そこで提案したのが、前の方はお年寄りがあまり足をあげずにペダリングでき、後ろの人は普通の回転方式の二人乗り自転車です。なぜこのような二人乗りかというと、ここに観光に来た人にゆっくりしてもらうため、観光協会を通してロッジ三泊や旅館に何日と予約した人には様々なサービスをします。しかしサービスだけではなく、例えば佐々木という人が観光者として来たときです。そうするとある時電話があるのです。「佐々木さん、あなたが泊まってるロッジの近くに清水さんというおばあちゃんがいるのですが、おばあちゃんが近くの公民館に行きたいと言うのです。足が不自由なので二人乗りの自転車がすぐ近くにあるので、それに乗せていっていただけませんか？」なんて言うと、佐々木さんは親切な人なので「いいですよ。ジョギング代わりに汗流しましょう。」と言っておばあちゃんを乗せます。そうすると公民館の何かが終わった後、おばあちゃんうれしくなって、飲み物を買って持ってきます。そしておばあちゃんに地元の小さな魅力を教えてもらいます。そうすると普段介護されている立場のおばあちゃんが、自分が面倒をみているという気持ちになって、生き生きと生きてきます。そして、観光客の佐々木さんは普段見えないところが見え、普段車でまわった時には絶対出来ない地元の人との交流が出来るわけです。「交流型観光」ということが果たされるわけです。つまり、地元の人々の移動手段であると同時に観光の人の楽しみの手段でもある。こういうものを提供することが出来

ないだろうかということでもいろいろ開発をしています。

部分的に、お年寄りが乗りやすい自転車も開発していき、実際に乗っていただいてこれから少しずつというように考えています。ところが、現状では自転車中心の観光は難しいのです。実際は日帰りスポット型観光が主流になっています。ところが道が混んでしまう、事故も多いということもあります。だからレンタサイクルとなりますが、現状では活用されていません。なぜなら、観光協会で貸出ししますが、時間が決められています。観光に来て四時半等に自転車を返してしまつたら、不満が残ります。それから、自転車の車種のほとんどが普通の自転車で、錆びていたりサドルがなかったりということがあって、うまく使えないということもあります。それからレンタサイクルや自転車等の情報がそもそもない場合もあります。私たちはレンタサイクルを活性化しようと提案しています。そのためには例えばレンタサイクル拠点を連携する。拠点Aのところから自転車を借り出した人はいろんな魅力を辿りながら遊んで拠点Bに行って、そこで返してもいいが、自転車でも乗せられる車高調整バスというのに乗って、違うところに行って降りてそこからまたいろんな魅力を辿ります。そしてまた拠点Bに行き、そこで返し、旅館に泊まれます。あるいは返して電車、バス、タクシーなんかを使いながらまた元のところに戻る、このように連携していくやり方があるのではと思います。また、これは地元の人でも使えるわけです。地元の方も魅力を辿っても、買物に行ってもいいです。また拠点Bから車高調整バスに自分の自転車を乗せてもいいし、車椅子でもよいです。千葉県先の先の方では、小さな町小さな村が寄り集ってコミュニティバスっていうのを

持っています。こういうバスをうまく連携するという方法もあります。自転車も、レンタサイクルもママチャリだけでなく、



自転車

様々なタイプを用意してあるといいと思います。お年寄りだったら、倒れにくい前二

輪三輪自転車、子ども用の自転車、丘陵地だったら電動アシスト付きや、さっき言った二人乗りの自転車等、こんなふうであれば選べます。



車高調整バス

そして、レンタサイクルを他の移動手段と連携させたらどうかということです。例えば、車高調整バスというものがあります。後ろの方がスーッと下りてきて後ろを開けますと、車椅子も入っていきます。自転車も乗せられます。お年寄りの手押し車も乗せられます。これは今日本でも開発ははじめています。その他例えば熊本電鉄が自転車の持ち込みを許可していますので利用者は近くの阿蘇町から、大きな町熊本の商店街に行く主婦の方々も中心になって自転車を乗せます。車椅子とかベビーカーも楽に乗れるというものです。地域交通を様々な手段を連携しながら、路線バスや電車だけではない、様々な使い方があるのではと考えています。例えば地域で同じチケットであらゆる交通手段を使うことが出来るというようなことです。そういう時には運営の仕組み作りがとて重要になってきます。レンタサイクルをネットワーク化するわけですから、その運営主体を育成しなければいけません。そしてサービス内容を検討しなければいけません。さらに、様々な人が参加するワークショップ、話し合いの場を設けてやってく必要があるかもしれません。それから、観光客だけでなく地域住民への自転車観光の重要性をPRする必要があるかもしれません。さらに、短期的に出来る今すぐ出来ること、中期的に出来ること、それからやがてやりたいことという様に分けていくと、実際的ではないかと思います。

このように考えていきますと、自転車に乗るとい

ことは自転車だけの問題じゃなくて自転車から見える景観、辺りの景色が気になります。自転車で走ってきますとあるいは車椅子で走っていくと、周りの景色がすごく気になります。コンクリートの義木で、いかにも木のように見せているようなコンクリートの手すりがあります。せっかくのきれいな景色が損なわれるのではないかということで、この地域に生えているものを竹、お年寄りたちに作ってもらおうということになりました。この近辺は砂防・防風林の前は、こういう竹囲いで防いでいたのです。それをもっとうまく生かしたらいいのではないかと考えました。それにこの地域は花畑がたくさんあるのですが、行ってみるとブルーのプラスチックのフェンス、ネットがたくさんあって外景がよくありませんでした。花よりもそちらの方が目立ってしまうのです。もし、こういうプラスチックシートや小屋がなかったらどう景色になるかという、花畑だけで、こちらの方がいいわけです。私が花畑のおばさんたちにそう言ったら、「風は除けなきゃいけない。」と言います。しかし青いフェンスが無くても竹のフェンスがあります。実は青いプラスチックのフェンスの代わりに竹囲いでも、機能は同じなのです。風を防ぐことが出来、隣のうちの花畑との違いがわかり、外景も自然になじみます。こんな具合に、この地域私たち一緒に生きていて、一緒に観光ということで利益を上げているので、地域イメージを全体みんなでも高めることが大事なのではと思いました。

このように、「ゆったり健やか型観光」を促進することを一方では行っています。この背後には、皆さんとともに追及している「ユニバーサルデザイン」という思いやりのデザイン、共生のデザインにある一人一人が一緒に生きていく、という考え方があるのです。だから私たちはいろんなものを臨機応変に考えていくのだと思います。そうすれば私たち一人一人の力だけじゃなくもっと効果的ではないかというようなことにつながるのではと思うのです。「点から線へ、線から面へ これからのユニバーサルデザインに求められる連携の発想」ということで、今お話ししたようなことを通して、「ユニバーサルデザイン」は実は意義のあることだと、皆で一緒に生きて楽しくやっていきたい、ということでした。



発行／(財)郡山地域テクノポリス推進機構

〒963-0101 郡山市安積町日出山字北千保19-8 ビッグパレットふくしま3F

TEL.024-947-4400 FAX.024-947-4475

平成18年3月発行

URL <http://www.techno-media.net6.or.jp/>

E-mail techno@nm.net6.or.jp